

早稲田大学環境総合研究センター(WERI)
早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

第7回ふくしま学(楽)会

ふくしまから伝えたいこと、
知らなければいけないこと。

報告書



日時: 2021年1月24日 10:00-17:40
会場: Zoom ミーティング
主催: 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)
共催: 福島県広野町
後援: 公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構、
双葉地方町村会、
早稲田大学アジア太平洋研究センター(WIAPS)、
早稲田大学環境総合研究センター(WERI)

2021年2月25日

【参加者数:145 人】

プログラム 総合司会：阿部加奈子（福島県広野町役場）

プレゼンテーション:9:30-10:00

磯辺吉彦（NPO 法人広野わいわいプロジェクト・事務局長）「福島県広野町『ぷらっとあっと』拠点から現地中継」

安部 良（安部良アトリエ級建築士事務所・主宰）「地域の伝統・魅力発信事業プロジェクト報告」

開会挨拶:10:00-10:15

遠藤 智（福島県広野町長）

松島武司（福島イノベーション・コースト構想推進機構）

小野田弘士（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター副センター長）

友成真一（早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科長）

1F 廃炉の先と地域社会:「復興と廃炉の両立」を考える:10:15-11:00

1F 廃炉の先研究会

崎田裕子（NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長）

吉田恵美子（NPO 法人ザ・ピープル理事長、いわきおてんと SUN 企業組合代表理事）

「1F 廃炉の先研究会と地域社会との対話について」

地域社会

吉田 学（HAMADOORI 13、株式会社タイズスタイル・代表取締役）・梨本 智（HAMADOORI 13、都重機土木有限会社・常務取締役）「地域の産業界から」

鈴木知洋（ふたば未来学園高校教員） 「地域の教育界から」

笠井智貴（磐城高校2年生） 「地域の未来世代から」

ふたば未来学園高校・未来創造探求ゼミ

菅波竜人、猪狩大樹、森俊輔、山内直、渡邊快、浅川悠（ふたば未来学園高校2年生）

「マイクラでつくる双葉郡」

木田莞奈、草野真綸（ふたば未来学園高校2年生）

「エネルギーからエコロジーへシビックプライドを形成する環境事業」

パネルディスカッション 1:1F 廃炉の先と地域社会:「復興と廃炉の両立」を考える:11:00-12:00

司会：松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）

パネリスト：宮野 廣（日本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長）、
奥田修司（経産省資源エネルギー庁・原子力発電所事故収束対応室・室長）、
崎田裕子、吉田恵美子、吉田 学、梨本 智、鈴木知洋、笠井智貴、渡邊 快、
木田莞奈

お昼休み:12:00-13:00

災害の記録と記憶の継承とエコミュージアムを考える:13:00-14:00

ふたば未来学園高校・未来創造探究ゼミ

渡辺あさひ、小野澤彩乃（ふたば未来学園高校2年生） 「未来を担う人材を」

古内千聖（ふたば未来学園高校2年生） 「正しい情報を私の言葉で」

高原耕平（人と防災未来センター主任研究員）

「〈語りたい〉と〈語れない〉のあいだで：神戸の経験から」

小林 孝（東日本大震災・原子力災害 伝承館・副館長） 「伝承館が語り伝えたいこと」

南郷市兵（ふたば未来学園中高校・副校長） 「問われる境界知作業者の役割」

パネルディスカッション 2: 災害の記録と記憶の継承とエコミュージアムを考える: 14:00-15:00

司会：洪 恒夫（東京大学博物館特任教授）

パネリスト：高原耕平、小林 孝、南郷市兵、小野澤彩乃、古内千聖、
青木淑子（富岡町 3.11 を語る会代表、3.11 メモリアルネットワーク理事）

休憩: 15:00-15:20

グループ討論および全体会: 15:20-16:30

「あれから 10 年、今何をすべきか」セッションに分かれて対話の 6 グループ: 15:20-16:10

全体会: 6 グループからの報告: 16:10-16:30

パネルディスカッション 3: 「3.11」から 10 年とこれからの福島復興を考える: 16:30-17:30

司会：森口祐一（東京大学大学院工学系研究科教授、国立環境研究所理事）

パネリスト：秋光信佳（東京大学アイソトープ総合センター教授）、江口哲郎（復興庁参事官）、橘清
司（福島県企画調整部・部長）、菅波香織（未来会議事務局長）、遠藤秀文（(株)ふた
ば社長）、芥川一則（福島高等専門学校教授）、荒川礼奈（ふたば未来学園高校 2 年生）

閉会挨拶: 17:30-17:40

松岡俊二：「3.11」から 10 年、第 7 回ふくしま学（楽）会の閉会にあたって

夜の部: 18:00-20:00

ふたば未来学園高校卒業生の近況報告、

ゲスト放談：ヴィヴィアン佐藤＋奥田：1F ツアー顛末記、島村守彦：活動報告

「福島県広野町「ぷらっとあっと」拠点について」

磯辺吉彦(NPO 法人広野わいわいプロジェクト・事務局長)



・講演者は広野町にある多世代交流スペース「ぷらっとあっと」の拠点づくりの取り組みを紹介した。震災後、広野町で従来のコミュニティが大きく破壊された。新しいコミュニティを築くために、講演者は人と人をつなぎ合わせることができる“場所”の必要性を感じた。

・講演者は地元有志に声掛け、みんなで協働して交流スペースを立ち上げようとし、「ちゃのまプロジェクト」を始めた。町民のニーズを調べた結果、それぞれ違うことがわかった。最後に、多

様な個性が合わさり、さまざまな世代が集い交流するプラットフォーム「ぷらっとあっと」を作り上げた。

・今高校生や地域内外の人々がぷらっとあっとを利用して、人と人の新たなつながりが生まれるのが期待される。

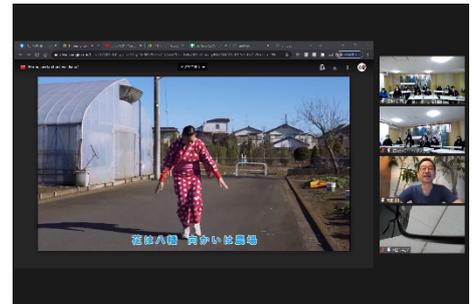
「地域の伝統・魅力プロジェクト活動報告」

安部 良(安部良アトリエ級建築士事務所・主宰)

・本事業は、安部良アトリエ級建築士事務所、広野わいわいプロジェクトのちゃのまプロジェクトなどの複数団体が協力し、地域の伝統・文化等の魅力を地域住民とともに発掘・再評価し、日本全国、さらに世界に発信していくことを目指している。

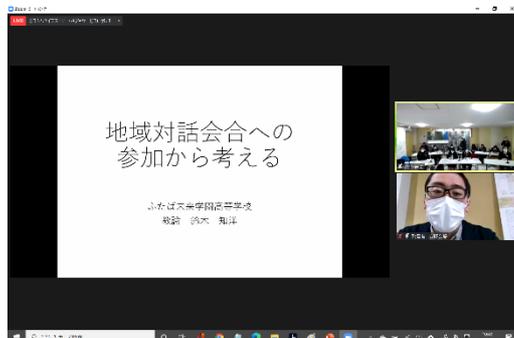
・本事業は、①地域の歴史を記録する「千年村プロジェクト」、②地図を描くことで、震災前のふるさとを思い出すアーカイブ・プロジェクトの「福島アトラス」、③地域の伝統楽曲(盆踊り)を再資源化する「再構築された音源の Zoom 収録による地域連携イベント」という3つのプロジェクトを企画している。

・プロジェクトの成果は、多世代交流スペースのぷらっとあっとで展示されている。地域内外に広野町の伝統魅力を発信していく。



【セッション1 1F 廃炉の先と地域社会：「復興と廃炉の両立」を考える】

(報告内容については、報告資料を参照)



パネル・ディスカッション 1: 1F 廃炉の先と地域社会:「復興と廃炉の両立」を考える

司会:松岡俊二

パネリスト:宮野 廣(日本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長)、奥田修司(経産省資源エネルギー庁・原子力発電所事故収束対応室・室長)、崎田裕子、吉田恵美子、吉田 学、梨本 智、鈴木知洋、笠井智貴(高校生)、渡邊 快(高校生)、木田莞奈(高校生)

松岡:10年経った時点にあたって、1F 廃炉事業と地域社会との関係、1F 廃炉と復興との関係をどう考えたら良いのかを議論したい。

宮野:地域社会の将来像を提案する際に、柔軟な提案ができれば良いと思う。2点申し上げたい。1つ目に、地域対話そのものだけでなく、地域対話によってどう地域復興へ貢献するのかを考える必要がある。今、福島の地元企業の1F 廃炉事業への取り組みが世界の原子力関係学会で評価されている。このような地元企業の取り組みが、今後、一步一步積み重なると良い。2つ目に、「廃炉知」とは何かを考えたい。1F 廃炉の情報をどう活用するのかが大きな課題となっている。世界の原子力技術者からみれば、原子力安全の検討に関する福島の1F情報は、非常に貴重な価値がある。こうした意味で、国際教育研究拠点の構想においては、世界から優秀な人材を集め、福島の1F情報を活用する仕組みづくりが必要である。「廃炉知」の活用を通して人口を増やすことで、地域復興にもつながる。

奥田:1F 廃炉は、今まで原子力産業に関わってきた人が引き続き関わっているのが現状である。この人たちだけでは1F 廃炉は成り立たない。さらに、地域社会の人口減少を考慮し、長期的な視点から考えれば、どのように原子力産業の関係者以外の人々にも1F 廃炉に参加してもらえるのかが重要となる。もう一つ、1F 廃炉の先を考えることは、技術だけでは解決できないため、地域住民との対話などの社会面も考えなければならない。まずは、1F 廃炉の現状を多くの皆さんに見てもらいたい。1Fの現状を把握した上で、地域対話の場を通じてビジョンを共有し、1F 廃炉の先を議論していきたい。

松岡:今後をどう地域対話を進めるのか、対話の場づくりの際に何に注意すべきなのか。

吉田(恵):地域の20年先、30年先、50年先のビジョンを共有する場が必要である。その場で地域の将来像をみんなで議論し、バック・キャストの手法で、その将来像のために、今、何をすることがあるのかを考えたい。また、1Fの遺構と呼べるものが廃炉でどんどん取り壊されている。解体してしまうと、将来世代は原発事故のイメージを膨らませることができなくなり、その時に後悔しても遅い。そのため、1F遺構の保存についても早く議論を始めたたい。

吉田(学):若い世代に共感や興味を持ちながら、1F 廃炉と復興に関わってもらうために、大人はどうしたら良いかを考えることが重要である。

梨本:若い世代が今の取り組みを引き継ぐことは難しい。何10年先、100年先の継続性をどう維持するのが課題である。

松岡:魅力ある1F 廃炉事業にすることができれば、自然と優秀な人材が集まるだろう。そのためにも、まずは大人が変革者になる努力をしないとイケない。

鈴木:未来学園で地域課題に取り組む探求プログラムを担当しているが、自分の頑張っている姿を生徒に見せなければならぬと考える。教員として生徒の探求活動に客観的なアドバイスを与えるだけでなく、自分の周りの地域課題の解決にも積極的に取り組むべきだと考える。私はこれから生徒に負けずに、失敗経験も含め、地域課題の解決のために頑張る姿を生徒に伝えたい。

崎田:対話の場で生まれた信頼関係を活かし、東京電力や専門家に限らず、皆んなで未来をどう創り出すかを考えることが大事である。

松岡:良い未来を創るために大人の努力が不可欠である。高校生の皆さんからは、大人たちを突き上げるコメントをいただきたい。

笠井(高校生):今の若者は、今の 1F 廃炉の課題や原発事故までの経緯についてよく知らない。しかし、若者と大人は 1F 廃炉という共通の目標を持っている。若者へは大人による現状説明が必要であり、大人は若者の未来への希望を聞く必要がある。こうして話し合いながらお互いの価値観を理解し合い、ともに 1F 廃炉へ向かいたい。

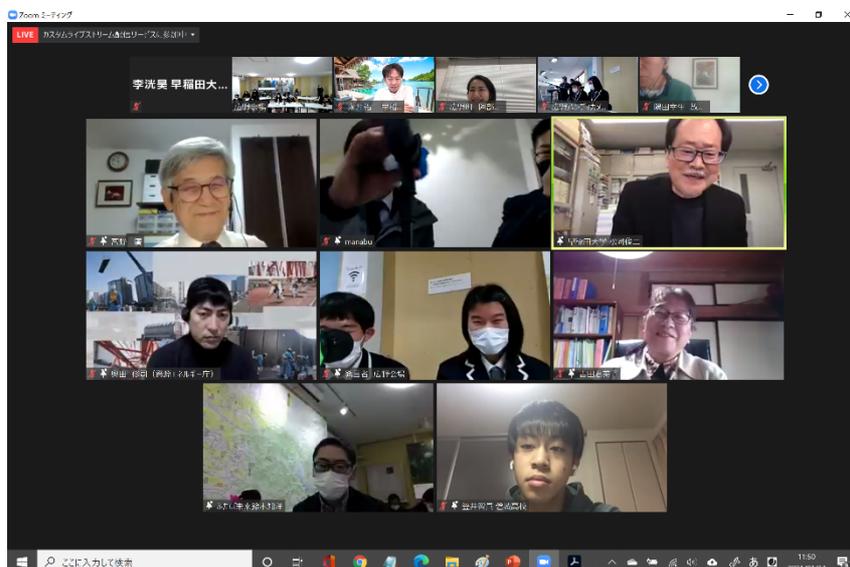
渡邊(高校生):浜通り地域の魅力とは他の地域にないものであると思う。1F 遺構を残して観光資源として活かしたら、地域社会に来る人口を増やせるし、原発事故の過去の教訓や記憶をいつも人々に意識させることができる。

木田(高校生):若者が知識不足などの理由で、大人たちの前で発言する際に恐怖を感じることもある。その恐怖心をどう乗り越えれば良いのかについて考えている。大人の意見が、時として間違っていることを指摘できないのも若者の悩みである。

松岡:大人もそれほど知識を持っているわけではない。どのようにフラットな対話の場を作るのか、さらに、どのように議論だけで終わらないようにするのかを考えたい。

宮野:みんなでいろいろな角度から議論し、共同で共通のビジョンを作り上げたら良い。

奥田:地域住民にとって 1F 廃炉は必ずしも生活の中心に据えられていないため、どのように多くの住民たちに対話に参加してもらって 1F 廃炉の先のビジョンを考えてもらうかが課題となる。そのため、住



民の対話への参加動機を整理することが大事である。また、人によって考えは異なるため、一つの大きな枠組みの中でさらに細分化し、グループ討論を進める形が良いと思う。

吉田(学):大人も人前で発言する際には、慎重に言葉を選んだりし、怖がっている。だから、対話の場の参加者の間のフラットな関係や、対話を通じて自分の変化が確認できる環境づくりが大事である。

梨本:対話の場で、参加者が人の目を気にして慎重的になる部分がある。大人として、若者の意見を重視すべきであろう。また、プラットフォームは各駅停車の電車のように、降り乗り自由であることが良いと考える。途中で暗いトンネルはあっても最終的には明るくなる。

鈴木:自分と距離のあるテーマの対話の場に参加することに、ハードルが高いと感じる人がいる。対話の場では、他人の意見を最初から排除する態度を取らないと同時に、自分の意見も他人に勝手に押し付けないようにした方がよい。そうした安心感から対話の場への参加意欲が生まれる。

笠井(高校生):対話をチームプレイとして考えたい。人によって立場や考え方が異なるが、チームの一員であることを自覚し、同じ目標に向かって、大人か若者かは関係なく、話しあっていたら良い。

渡邊(高校生):他の地域社会の住民の気持ちも配慮して発言を躊躇し、結局、自分の意見をうまく言えなかったことがある。対話の場づくりには、立場に拘束されずに自由に発言できる雰囲気が重要である。

木田(高校生):楽しく対話できたら良い。

宮野:「ふくしま学(楽)会」の「楽」は楽しいことを意味し、楽しい雰囲気が重要である。また、若者の皆さんは大人の意見を遠慮せずに反対して良いと思う。

奥田:自分の思いを言わないと伝わらないため、思いを伝える安心感や信頼感の醸成が大事である。ふくしま学(楽)会のような知らない人とも安心して自由に話せる場を継続してほしい。

吉田(学):今日、ふくしま学(楽)会に参加し、地元にもたくさんの人材がいることを知った。是非、皆さんと一緒にHAMADOORI 13として地域復興のためにこれからも頑張っていきたい。

梨本:若い世代と交流できて良かった。これからも参加し続けたい。

鈴木:ふくしま学(楽)会でできたつながりが他のところでも広げられたら良い。

笠井(高校生):将来、高校生という肩書きがなくなっても、大人として地域復興と1F廃炉に関わっていきたい。

渡邊(高校生):ふくしま学(楽)会でできたつながりを今後の探求活動で活かしたい。

木田(高校生):今回のふくしま学(楽)会を通じて、自分たちの発言が大事であると気づいた。恐怖心を克服して発言し続けたい。

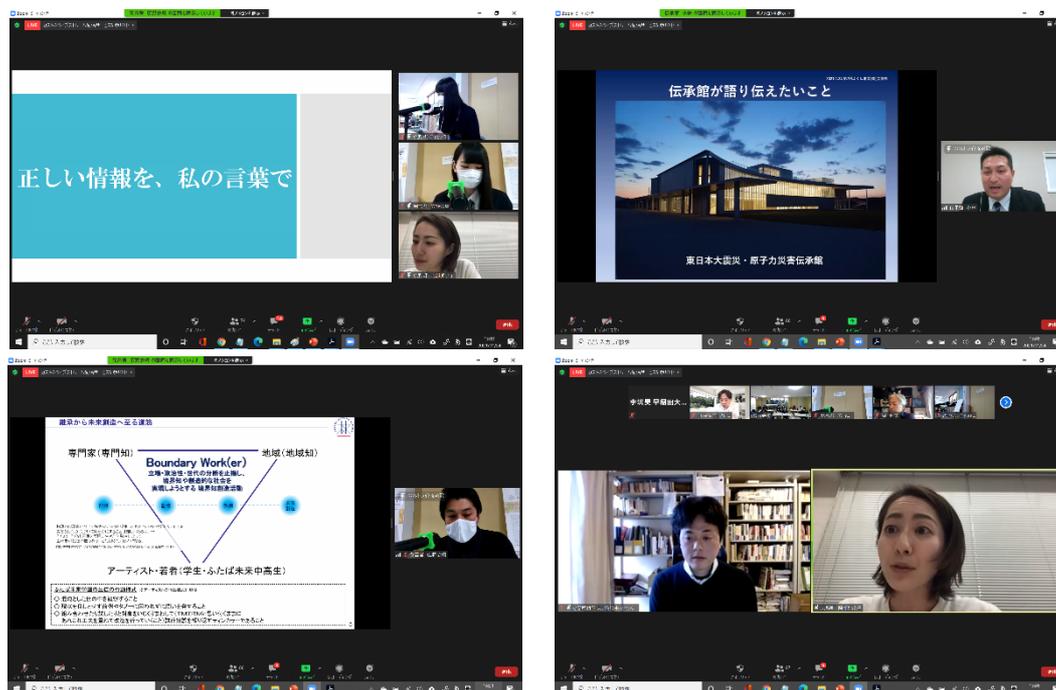
吉田(恵):1F廃炉の先研究会に入ってから、専門家でも分からないことがあることを初めて知った。や

はり、本音で会話を交わせる関係を築くことからスタートするのが良い。仲間を広げることにより、地域社会の未来づくりの可能性も広がるので、ふくしま学（楽）会をさらに広げてほしい。

崎田:対話の場が議論だけにとどまらないように、ビジョンづくりが必要であるとの話があった。そのビジョンでは、みんなで復興と廃炉を両立させ、住みやすく活力のある町をどう作るかが大事なポイントであると思う。そのビジョンを実現するプロセスを考えるプラットフォームをこれからみんなで築きたい。

【セッション2 災害の記録と記憶の継承とエコミュージアムを考える】

(報告内容については、報告資料を参照)



パネルディスカッション2: 災害の記録と記憶の継承とエコミュージアムを考える

司会: 洪 恒夫(東京大学博物館特任教授)

パネリスト: 高原耕平、小林 孝、南郷市兵、小野澤彩乃(高校生)、古内千聖(高校生)、青木淑子(富岡町 3.11 を語る会代表、3.11 メモリアルネットワーク理事)

洪:エコミュージアムとは、一定の文化圏において人々の暮らしや自然を総合的に研究し、地域社会の資産や遺産を現地において保存、育成、展示することによって、地域社会の発展に寄与することを目的とした野外博物館である。つまり、一極集中型でなく、点を線に、線を面にするような広域的な分散ネットワークという理念である。福島浜通り地域で国際教育研究拠点を作る際に、エコミュージアムの考え方が参考になると考える。今日は、福島復興にふさわしいミュージアムや拠点のあり方について、皆さんと意見交換をさせていただきたい。まずは高原先生に伺いたい。阪神淡路大震災の記憶継承において、特に若者とのコミュニケーションについて、何か福島に参考になる経験はあるのだろうか。

高原:語りの辛さは阪神淡路大震災と福島との共通点であるが、相違点と言えば、福島は阪神淡路よりストーリーが複雑である。また、複雑でありながら、様々な小さい話が語られている。それらの小さい話を一つずつ集めて広げるのが良い。若者の取り組みについて、人と防災未来センターは「災害のメモリアルアクション」というイベントを発災以来 20 年間実施してきた。イベントに参加する大学生や高校生は、大人世代の期待にとらわれずに、自分の主体性を生かして、防災活動をしている。また、若者が新しい伝え方を開発し、大人世代から受け継いだ災害記憶を発信している。

洪:高校生の報告にあったアンケートでは世代間の答えの違いが興味深かった。世代の違いが今後の課題になる可能性がある。世代間の違いについてどう思うか。

渡邊(高校生):アンケートで感じた世代間の違いとは、私たちより若い世代では震災の記憶が薄れつつあり、現在の状況が当たり前だと考えていることである。そのため、地域復興への関心度も低い。世代間の考え方のギャップがアンケート結果に出ている。

洪:高校生ができることをしていくとの発言もあったが、若い世代として、自分ができること、やって意味のあることは何か。



古内(高校生):例えば、私は YouTube で発信を続けており、その発信や現在取り組んでいる探求活動を続けることが大事であると考えます。一回だけではなく、継続していけば大きな意義を持つようになる。

洪:時代の変化の中で、蓄積された資料の保存・展示方法も変わっている。例えば、動画など若者に入りやすい、響きやすいメディアが大きなインパクトを持つ。長期間にアーカイブされた資料を、今後、どのように表現していくべきなのか。ミュージアムの形式に限定しなくても良いが、どういう発展の可能性のあるのかを考える必要がある。

小林:避難指示が解除されていない地区がまだあり、これから新たな資料が出てくるかもしれない。それをどう活かすかが課題となる。また、地域社会に人が住んでいない空き家がたくさんあり、町並みが避難当時の様子そのままである。その様子を保存することも大事であると考えます。

洪:実際のを現地保存することは、エコミュージアムの言葉で言えば「サイト」といい、建築をそのまま保存するのもミュージアムとして捉えることができる。時間は大きなキーワードであると考えます。

時間経過と共に世代が変わっていく中で、長期間のアーカイブについて何か意見はあるか。

南郷: 未来学園の一期生世代同様、今の生徒も震災を語り続けている。ただ、語り方が変容している。今日、発表した生徒たちは原発事故を小学校1年生で体験し、原発見学などもしたことがなく、原発が安全だと教育されたこともない。そのため、原発に対する受けとめ方は世代によって大きく異なる。この先は、原発事故に対する記憶が全然ない世代になる。学校、あるいはふくしま学（楽）会のような場の役割はこれから正念場を迎える。今日発表した生徒の半分は双葉郡以外の出身であるが、自分事として地域課題の解決に邁進している。その姿勢をどう次世代へ伝承するかは、これから正念場を迎える。

洪: 情報発信の媒体は時代に伴って進化している。自分事として捉えるために、まず興味を持つことが必要である。今は Vlog や演劇など多様なアーカイブがあり、生の語り部と違う形で発信し届けたりして、とても有用な部分もある。青木さんはそれについてどう思うか。

青木: 語り部のように、対面で話すことに大きな意味がある。ものはものでしかない。言葉を使わなければ、人の心は伝わらない。今は新型コロナの影響でオンライン会議や動画で語りをしているが、私はやはり face to face が好きである。聞き手の表情から、伝わったかどうかフィードバックされ、そのフィードバックから語り方を調整していくことが重要である。また、記憶の継承については、語り部は記憶継承だけでなく、一緒に考えていく仲間を増やすことも重要な役割である。原子力災害の処理は進行中であり、まだ記憶ではない。原発事故を体験したかどうかにかかわらず、大事な今は今を考えることである。

洪: ライブは何かの思いを発信し、それを見た人たちが見て感じて、感じたものがまた未来で何かの課題解決になる。アーカイブも長い時間の中で、いろいろな変化が起こり、そこから課題の解決策が生み出され、そして新しいアーカイブになる。その場合、どういう施設、どういう場が良いのか、それは非常に長い時間で考えなければならない。現在進行形で進化していくような場が福島に必要である。若手の皆さんの今やりたいことは何か。

渡邊(高校生): 学校のような環境を作りたい。そこで震災の記憶を伝えることにより、相手に興味を持ってもらい、自分から震災を学んでもらいたい。

洪: 高校生の「学校のような未来につなぐ場」を築く発想は心に響いた。多様なステークホルダーがいて、単純なストーリーでなく、多様な切り口や対応策なども含めて検討するのが良い。対話によって過去のことから学んで、何かの解決策を考える。そのようなプラットフォームは福島に必要である。また、記憶継承をソフトとすれば、エコミュージアムなどの場がハードである。ソフトとハードの連携のあり方は、今後の A&S 研究会でさらに検討したい。

青木: 高校生の報告の中で、アンケートで双葉地域に住みたいと答えた人が少ないのが問題であると言及された。それは、地域社会の大人の怠慢だと思う。高校生は積極的に行動しているが、その活動が生徒の在学期間で切れてしまい、地域社会で学ぶ場が続かないのは、私を含めた地域住民の怠慢のせいだと思う。地域社会ではまだ復興していないと思われているが、しかし、どうなったら「復興した」と言えるのかについてしっかり考えたことがない。地域復興のあり方について、富岡町では市民レベルの勉強会が始まっている。私は、富岡町が「学びの場」になるのが良いと思う。若者が学べる場、あるいはエコミュージアムのように、町そのものが望ましい町の姿となるための学ぶ場になったら、富岡町は復興したと言えるだろう。

洪:学びの場は魅力的である。これは広い意味での「学び」である。特に、被災地のマイナスの資源をどう学びの教材へ転換させるのかが重要である。また、学ぶということは正解を学ぶのではなく、人によって学ぶことが異なることが重要だ。

南郷:未来学園と伝承館を含めた、他の地域の高校の修学旅行コースを企画しており、同世代で記憶を語りあうことを実践しようとしている。3月に、演劇部は伝承館で自分の経験をもとにした演劇を披露する予定である。若者の視点がよく取りこぼされるが、若者の視点を表現する場を作るべきである。さらに、若者はVlogを作成したり、マイクラフトでバーチャルな1Fを再現したりして、若い世代の視点と表現が新しくアーカイブする価値のあるものになる。そういうサイクルが作り出されていると実感している。

洪:学びの場は学校だけでなく、教育するということにとどまらず、自分の次のアクションに役立てるものを学び取れる場所も含めて学びの場であると考えられるのではないか。

【セッション3 グループ討論及び全体会:「あれから10年、今何をすべきか」】

崎田グループ

- ・若者だけでなく、大人たちの取り組みも見える化にするほうが良い。
- ・語り部を通して仲間を増やすとの話のように、人と出会うことが重要である。
- ・国や東電の情報を地域社会に一方に伝えるのではなく、住民や市民の声を国や東電に伝える仕組みがあるかどうか重要である。そのため、地域社会、東電・国がお互いに本音を話せ、ともに地域の将来を考える対話の場を作る必要がある。

小野田グループ

- ・復興と廃炉をそれぞれ10年進めてきたが、両者の連携はまだ足りない。ふくしま学(楽)会のような場を借りて、両者の協力を充実したい。
- ・未来学園の高校生から自分の活動成果を発信する場がほしいとの意見があった。
- ・1F遺構の保存について、モニュメントなどのハード面の議論のほか、地域社会の自律や地域づくりのソフト面も重要である。また、1Fの中にあるデータを研究に活用できるようにする仕組みも求められる。
- ・10年経った今、フラットな対話ができる環境になったため、対話そのもののプロセスが重要である。

大和田グループ

- ・未来学園の探求プログラムの質が高く、生徒が卒業した後も勉強が続いているのかを知りたい。
- ・福島浜通り地域内の他高校との連携も進めた方が良い。
- ・福島の食品の風評払拭が地域学習の一つの良いテーマである。

安部グループ

- ・記憶伝承は聞くだけでなく、実際のアクションも併せたほうが効果的である。
- ・地域知を共有するため、記憶伝承から共感を引き出すことが必要である。それに対し、科学知を共有するにはサイエンスカフェのような場が必要である。
- ・福島復興には多様な切り口や問題がある。発信することによって、福島復興の問題の多様性を明確に

させることとなり、自分事として捉える人が増えるだろう。

岡田グループ

- ・地域復興は進行中なので、アーカイブから復興を担っていく人への発信が最も重要である。
- ・世界から福島がどう見られているか気になる。
- ・ハコモノだけでなく、SNS も含めたプラットフォームの構築を期待する。その際に、多世代が co-design などが可能なプラットフォームを共創していくことが重要だ。

小松グループ

- ・若者は、従来と異なる新しい媒体で発信している。新たな可能性を拓くことを楽しみにしている。
- ・原発事故から 10 年間、いろいろな対話活動が行われているが、対立構造になることが多い。そうした状況で、地域社会の将来ビジョンが議論しにくい。ふくしま学（楽）会は設立して 4 年で、世代・地域・分野を超えた人々が対話することにより、分かりあえる場が形成されてきている。
- ・アーカイブはエコミュージアムなどの形式があるが、これからの 10 年につなげるためには、地域社会の将来ビジョンが大事である。そのビジョンを作るために、ふくしま学（楽）会のような場が必要である。

パネルディスカッション 3: 「3.11」から 10 年とこれからの福島復興を考える

司会: 森口祐一(東京大学大学院工学系研究科教授、国立環境研究所理事)

パネリスト: 秋光信佳(東京大学アイソトープ総合センター教授)、江口哲郎(復興庁参事官)、橋 清司(福島県企画調整部・部長)、菅波香織(未来会議事務局長)、遠藤秀文((株)ふたば社長)、芥川一則(福島高等専門学校教授)、荒川礼奈(ふたば未来学園高校 2 年生)

森口: どうなったら復興と言えるのか。終着点を定義するのは難しい。前半はこれまでの 10 年を振り返り、後半はこれから先をどうしていくのかを中心に議論したい。

秋元: 10 年経った今、福島のイメージが固定化されてきていると感じる。実際には多様な人が多様な切り口でいろいろな顔を持っている。その多様性の情報発信をこれからの 10 年の中でしていくべきだと思う。

荒川(高校生): 私は震災後、5 年間、東京へ避難していた。中学校の時に広野町に戻ってきた。この 10 年間、避難した人の帰還できる環境づくりが進んでいると感じる。震災で壊れた環境を修復するのがこれまでの 10 年であった。

江口: 10 年経ったからこそ、今将来を展望することができた。以前は宮城など他の被災地の復興に関わってきて、今年から復興庁の立場から福島復興に携わるようになった。福島の状況はやはり他の被災地とはかなり違うため、コロナが収束してから、地域の空気を吸って、真剣に福島復興に取り組んでいきたい。

芥川: 事故から 10 年経って、地元で信頼関係が一部回復していると感じる。50 年前、原子力は浜通り地域で未来のエネルギーであると思われていた。しかし、その憧れが 2011 年に崩壊した。そのため、未

来の 10 年に向けて、新しい未来の光を見つけ出すことが必要である。特に人口減少の背景の中で、産業育成が重要である。さらに、30 年後の日本の他の地方自治体の人口構成は、今の福島浜通りと同じようになる。今、浜通り地域の地域課題の対策を考えておくことは、30 年後の日本の他の地方自治体のためにもなる。未来の光はイノベーション・コースト構想の中で見つけられるだろう。



橘:今、福島県は復興知事業などを実施し、集中的に浜通り地域を支援できるようにしてきた。今年度は 3.11 に追悼復興祈念式が福島市で開催される予定であるが、そこには追悼の観点と復興の観点がある。追悼の観点については福島地域において基準が一つであるが、復興の観点については浜通り、中通り、会津地方によって人々の感じ方が大きく異なる。福島県は人々の異なる気持ちに寄り添いながら、復興を進めていきたい。今後の 10 年に向けて、特に浜通りでの復興の進展に応じて顕在化してきた課題をみつけることが重要である。これまでハード面を中心に取り組んできたが、これからソフト面にも力を入れていきたいと考えており、このような対話の場に参加し、多くの方から意見をお聞きしたい。

遠藤:震災の経験者として、この地域をより魅力的な場所に変えたい。震災後 6 年の地域外の生活と地域に帰って 3 年半の生活を通して、地域内外の視点が全く違うと感じており、課題の根深さも改めて感じている。浜通りでは自然災害と原発事故という複合型災害の影響で、コミュニティの崩壊が大きな問題となっており、こうした状況の中でコミュニティを再生するのは世界にも前例がない。浜通りの経験は日本や世界のためにもなると考えられるため、こうした点を認識しながら、これまでの 10 年を一度整理し、11 年目をどう迎えるかを考えなければならない。

菅波:今日報告した高校生の半分が双葉郡以外の出身であり、地域の復興を広げて考えることが大事であると思った。また、人によって様々な関心や立場があり、例えばマイクラフトという形式で子供や若者の興味を起す。多くのそのような点が今日のふくしま学（楽）会で生まれ、これらの点が線に、線が面になることを期待する。私は以前、対話しても無駄だろうと落ち込むことがあったが、対話は未来を作ると崎田さんが言ったように、今日の議論を聞いて対話の希望がまたみえてきた。

秋元:マイクラフトのような若者だからこそその発想があり、その多様性を応援したい。学校教育は「押し付ける」のではなく、「引き出す」ことであり、若者のアイデアや感性を引き出すことが重要である。また、この 10 年で外部からの福島に対する大きなイメージができていますが、実は福島内部では復

興の度合いが地域によって異なる。また、世代間にも違いがある。エコミュージアムのような舞台を作れば、人々の多様性を地域外に発信しやすくなるし、また地域内でも共有しやすくなる。そのような活動を一回だけでなく、繰り返して行うことで、知の創造や共感の創造を図るべきだ。記憶継承のソフト面と 1F 遺構の保存や伝承館のハード面の融合が、これからの 10 年の間にしていくべきことである。

荒川(高校生):若者が未来のことを考えることが大事であると思うので、探求プログラムで「まちづくり」をテーマにした。避難した人が帰還するためにどうすれば良いかを問題意識としてきた。将来は教育に携わって、教師の立場から震災のことを語り続けたい。また、未来学園以外の高校の生徒も自分の意見を発表したりしているが、まだまだ発信の機会が少ない。高校生の発信の機会を増やしたら良い。

江口:未来学園の生徒の活動に感心した。復興庁は現在、国際教育研究拠点づくりを検討している。技術革新が起こすため、多くの資源を集中的に投入し、社会システムも技術革新に合わせて調整することを考えている。しかし、今日の議論を聞いて、むしろ逆で、社会システムの強化こそ社会発展につながると感じた。地元の皆さんが積極的な思いを持っているならば、将来の地域復興の実現も可能であると期待する。

芥川:私はピンチをチャンスに変えるべきであると考え。今は、規範論で固まっている社会ではなく、いろいろな変革が待たれている社会である。イノベーション・コースト構想は良い名称であるが、イノベーションが足りない。イノベ機構は従来型の手堅くできるものばかりに資金をつけているが、浜通りは昔のものが破壊されたからこそ、新しい展開を考える取り組みを考えるべきだ。そうしたイノベーションに、自治体や国は目を向けていただきたい。

橘:イノベーション・コースト構想は廃炉、ロボット、再生エネルギー、農林水産、航空宇宙産業、医療産業という 6 つの分野があり、自然科学や技術が中心である。福島県は研究開発をしやすい環境と研究者が活動しやすい環境づくりを使命として、国とともに作っている。今後は、ふくしま学（楽）会のような対話の場での県民の意見をどう政策作成に反映させるかに関心を持っており、双葉郡あるいは避難地域でそのような仕組みを整えたい。

遠藤:福島のメッセージ性のあるキーワードはまだ明らかになっておらず、それを設定することが重要である。また、震災後に浜通り地域で多くの新しい施設ができたが、それぞれの接点がない。枝葉は多いが幹がない。なお、社会的側面の研究と科学技術研究との両方の融合が浜通り地域の課題解決には非常に重要である。浜通りの課題解決の経験が、20 年後、30 年後の日本の他の地方自治体の参考になれる。今後、地域復興のグランドデザインの作成に、どのように住民参加を促すのかも重要である。30 年後ぐらいの将来目標を立て、逆算して、今、何をなすべきかを議論する必要がある。

菅波:未来学園の卒業生が、探求プログラムを続ける仕組みがないことを問題提起したが、例えば、国際教育研究拠点のような場において、若者と大人がともに社会的課題について対話を重ねることができれば良いと思う。また、ビジョンの共有というキーワードもあったが、多様な人々の間でのビジョン共有は難しい。代わりに、ビジョンを考えるプロセスを共有するほうが良い。対話を重ねるうちに、自分の考えも変化し、その変化がまた新しい議論につながっていく。今日、ふくしま学（楽）会に参加したみなさんも、何か考えの変化があったかを別の場で、家族、友人とも共有していただきたい。そうすると、今日の成果がさらに広く伝播される。

【閉会挨拶】

松岡俊二「『3.11』から 10 年、第 7 回ふくしま学(楽)会の閉会にあたって」

「3.11」から 10 年、第 7 回ふくしま学(楽)会の閉会にあたり、ふくしま学(楽)会の「原点」についてお話ししたいと思う。私たちは、なぜ、今、この場に集まっているのか、皆さんそれぞれの想いがあり、それぞれの 2011 年の「3.11」に関する「原点」があり、この場に集まっていることと思う。

私にとっての「3.11」の原点は、2011 年 3 月 12 日、スリランカの世界遺産都市・キャンディ市のホテルのテレビで、BBC 国際放送による福島第一原子力発電所 1 号機の爆発映像を見たことであった。まさに、雷に打たれたような衝撃を受けた。早稲田大学で学生たちに気候変動問題について講義し、CO₂削減のためには原子力発電も安全性に配慮しながら活用すべきと話していた大学教員としては、痛恨の極みであった。これからは、日本の社会学者として、日本の大学の研究者・学者として、福島原発事故のことを研究し、その教訓を伝えていく教育をしようと決めた。これが、私にとってのふくしま学(楽)会を開催してきた原点である。

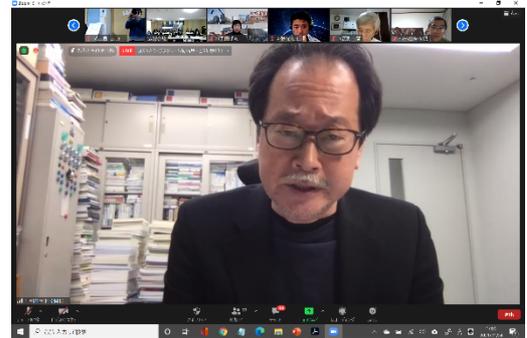
ミュージシャンの坂本龍一さんが福島原発事故から 10 年に際しての新聞インタビューで、南米の先住民に伝わる「ハチドリのひとつづく」の話をしている。山火事に対して、小さなハチドリが一滴ずつの水を運んで消そうとして、周囲の動物たちに嘲笑され、ハチドリは言う。「私は、私にできることをしているだけです」と。

早稲田大学出身の作家・村上春樹さんは、パレスチナ・ガザの紛争が大きな問題となっていた 2009 年 2 月、散々迷った末に出席したイスラエルの地でのエルサレム賞・授賞スピーチで、壁と卵の話をしている。"Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg"、「高くて硬い壁と、壁にぶつかって割れてしまう卵があるとき、私は常に卵の側に立つ」と語り、「私たちは、システムと呼ばれる高くて硬い壁の前の壊れやすい卵です。誰がみても、私たちが勝てる希望はありません。壁はあまりに高く、あまりに強く、そしてあまりにも冷たい。しかし、もし私たちが少しでも勝てる希望があるとすれば、それは皆が持つ心が、かけがえのない価値あるものであると信じ、その心を一つにあわせたときの暖かさによって、やがて壁を崩すことができると信じています」と語った。

私にとって 2011 年 3 月 11 日の福島の教訓とは、これからの学者人生を「ハチドリのひとつづく」として、「壁に立ち向かう卵」として生きていくことであった。

まもなく 10 年を迎えようとしている。この 10 年で何が変わり、何が変わらなかったのか。新型コロナに世界が翻弄され、苦しんできたこの 1 年、新型コロナ対策と日本社会を見ていて、10 年前の福島を見ているようなデジャブ、既視感を強く感じている。昨年来、新型コロナ対策で議論されている PCR 検査の重要性や法整備の問題などの全てのことが、10 年前の 2010 年 6 月 10 日に発表された厚生労働省の新型インフルエンザ対策総括会議・報告書で指摘されている。10 年前の厚労省報告書は、国や社会の早急な対応の必要性を強く提言していたが、この 10 年間、私たち日本社会は何もせずに新型コロナのパンデミックとなり、この 1 年間の対応も、まるで福島原発事故対応を見ているような too little, too late、小出し、後手後手、右往左往の対応が続いている。

福島原発事故から 10 年、新型コロナという感染症パンデミックの中で、改めて歴史の教訓を学ぶことの難しさを痛感するとともに、どのようにすれば歴史の教訓を学ぶことが可能になるのかを広く深く



考えたいと強く感じている。

東日本大震災という自然災害、1F 事故による原子力災害、COVID-19 パンデミックという生物災害、それぞれに多様な教訓があり、社会環境の変化の中で教訓自体も進化すべきものである。大切なのは、そうした進化する教訓の基盤となる災害や復興に関する多様な記録や記憶を調査研究・収集保管し、広く社会に公開し、国際的に情報発信する新しい知の拠点、アーカイブ、博物館・ミュージアムといった社会制度や社会組織を、21 世紀の日本に不可欠な社会インフラとしてしっかりと整備することである。

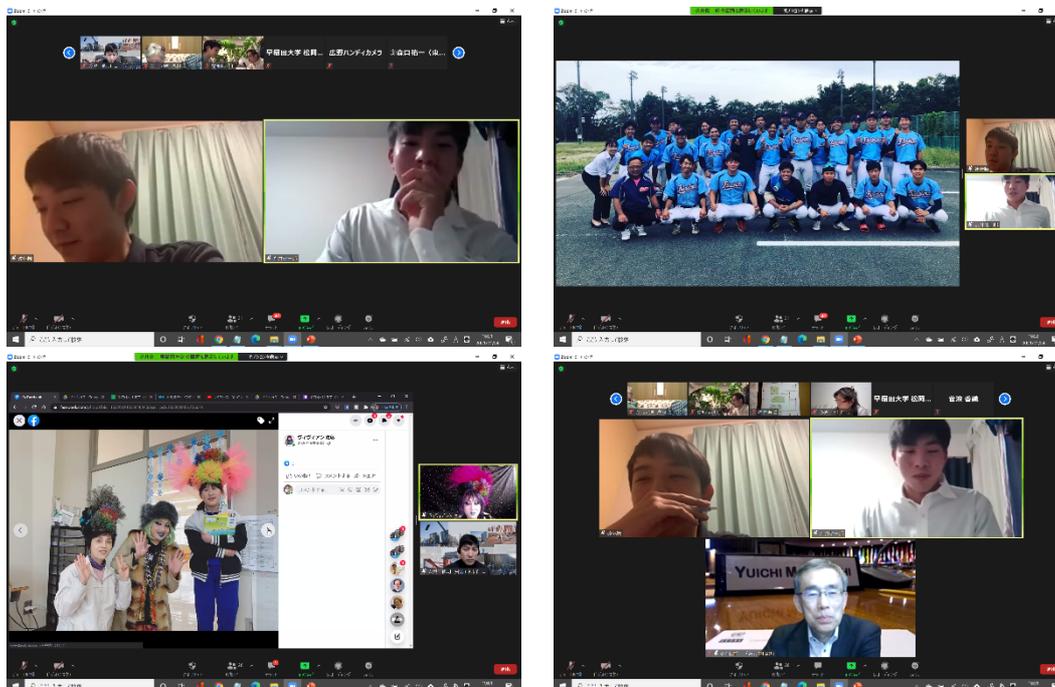
東日本大震災という自然災害からの復興と原発事故による原子力災害からの復興という二重の重い課題を背負ってきた福島復興は、今、新型コロナによるパンデミックという生物災害からの復興という三重の課題を背負うこととなっている。今こそ、「福島の再生なくして日本の再生なし」という福島復興の「原点」を再確認し、災害の世紀・21 世紀における地域社会再生モデルとしての福島復興モデルを広く国際社会へ示すべき時だと考える。

本日は、朝 9 時半からのプレセッションも含め、長時間の第 7 回ふくしま学（楽）会に、世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、多くの皆さんにご参加いただき、第 1 セッションの 1F 廃炉の先と地域社会、「復興と廃炉の両立」を考える、第 2 セッションの災害の記録や記憶をどのように継承し、社会が歴史の教訓をどのように学ぶのか、第 3 セッションの「3.11」から 10 年とこれからの福島復興のあり方、それぞれ大変熱心なご議論をいただき、誠にありがとうございました。引き続き、夜の部もごございますので、お時間のある方は、是非、夜の部へもご参加ください。

最後になりますが、第 7 回ふくしま学（楽）会の開催にあたり、ご尽力いただきましたふたば未来学園中高校、広野町役場、広野わいわいプロジェクト、ぷらっとあつとなどの関係の皆様にご心よりお礼申し上げます。また、事務局の皆さんにもお礼申し上げます。

本日は、大変ありがとうございました。

【夜の部】





【チャット】(抜粋)

・利益を生まない廃炉という表現に驚きです。これから国内でも多くの原子炉が廃炉になります。福島で得られた先端技術は役に立つでしょう。また、多くの自然災害からの復興にも使えると思います。

・東京在住者としてできること、やるべきことは何でしょうか？すでに脱原発になっている福島県になって脱原発への運動はしているのですが。

・「地域の産業界から」の発表内容にございました廃炉の利益に関してなのですが、現状の1F廃炉に対する技術・地域への利益還元が分かりにくい状況にあるという意味でよろしかったでしょうか？

・対話の場がコミュニティであるというのは本当にそうだと思います。哲学対話の研究実践の分野では、対話の場を *safe community for inquiry* と呼ぶことがあります。

・多分、課題が難しく成果を得難いと言う思いがあるからかも知れません。しかし、ドローン技術などは、割と実現しやすいので、他への転用も考えられることでしょう。宇宙への展開もありえます。

・地方創生の観点からは廃炉のある・なしで考えてみると、他の地域にも応用できる考え方が出るかもしれない。

・学校教育の場で対話を経験することは大変重要です。日本では対話の場が少なく、対立すると自分の主張の押し付け合いになっていたと思います。合意を目指した対話を学びましょう。

・1F廃炉と廃炉後について漠然とした対話というのは難しく、何か青写真を作り、その青写真に対してディベートをして考えてもらい、行政区などの小さな単位でディベートを公聴した内容を踏まえて対話・議論してもらうのが一般市民にとって自分事化する一番の近道なのかなと思います。

・1F廃炉に関する技術に関して、高校生の方々がどのような点に魅力を感じる傾向にあるか興味があります。ロボット技術か、あるいは最近、話題になり始めたデータ活用・AI技術あたりでしょうか？あるいは原子力に直接関わる技術でなく、地域振興に関わる要素のほうが反応が良いなど、教室のリアルな様子について伺えましたら幸いです。

・1F廃炉をするのは人という言葉がその通りだなと思いました。福島第一でも指導する人より、現場で作業している方々の実態や声が大事だと思います。

・我々の世代よりも、高校生世代の皆さんやもっと若い世代が 1F 廃炉そして廃炉後の地域課題に大きく影響されるので、大人たちに「お前ら年寄り黙ってる！未来の話は我々に任せとけ！」くらい言っちゃっていいと思います。

・今、原発を建設した世代が次々退職しています。それゆえ世代を超えた交流が重要です。何を伝え、また、若い人は何を知りたいか？

・大人世代は未来の人たちへの責任を果たすつもりでいるけど、もう若い世代に主導権を譲ってしまっていていいのかも。

・今の若い人たちは進んでいますね。社会的にも進んでいる印象を受けました。若い人たちに期待します。

・今の政治システムである中央集権体制は限界に達しています。地方分権体制には中々移行できていませんが、高校生の皆さんの発表を聞くと、自然発生的にもうその流れは芽吹いていると感じます。

・マイクラ、シビックプライドのみなさんへ。双葉郡では原発だけでなく「30年後県外」だとしても放射能も否応なく残ります。最近の SDGs でも温室効果ガスだけでなく有害物質や廃棄物を環境に出さずに管理していくよう求められています。

・10年後を想定した具体的な廃炉産業を考えてみることは意味があるのではないかと。過去の10年と現在を比較すれば、今後の10年でできることは何かが見えてくるのではないだろうか。10年後には高校生も28才になる。

・あらゆる可能性を排除しないで考えていく、チャレンジしていくことが大切！

・原子力発電所を遺構として残すのか否かの議論は、早めにやらないとですね。そこをクローズアップして、広い立場と広い世代で議論する場をつくりたいですね。

・文化的な意味での史跡の実物保存は、私個人も非常に重要であると思います。

・近年はデータ社会と言われ、あらゆるものがデジタル化され保存されるように思われがちですが、逆に記録の取舍選択が先鋭化され、目立つモノのみが後世に残るモノに変質したと思います。あらゆる時代の中で明確に当時の状況を語り継ぐためには、史跡が必須であると思えてしまいます。

・史跡の件でも、1F 廃炉の先研究会でも、現在の価値観で残すべきものを判断することは危険で、将来必要になる、あればよかったというものが出てくるので、残せるものはできるだけ残す方が良いのではないかと議論がありました。

・アイデア出しは若い人たちにしてもらって、ややこしい手続きやら経験からのアドバイスを我々おじさん、おばさんが担えばいい。

・子どもと大人の世代間対話をよりフラットで生産的なものとする手段として、日本人だけでなく他の国籍の子ども達を交えて話し合うと、日本の子ども達も刺激を受けてより積極的に話せるようになると

いうこともありました。

・気にせずに参加できる場を作ることが必要で、だれでも自由に参加でき、発言できる場がどの世界もできていないので苦労しているのです。

・「トンネル」経験を共有するのが大事かもですね。また、「責任世代」と言いすぎるのもよくないかもですね。

・わたしは長年、子ども支援、子どもの権利活動に携わってきて、昨年から「健康な環境に対する子どもの権利」の実現を目指すグローバルムーブメントに参画しています。このムーブメントでは世界中の子ども達の意見を募集し、各地で子ども達との対話を目的としたワークショップを開催しています。わたしの印象では、日本国内より海外に向けた、あるいは国際的な場のほうが子ども達も発言しやすいし、子どもの意見もきちんと聴いてもらえているに感じています。

・場の多様性を維持する努力をする。下手に統合しようとしなないということも大事な気がしました。

・マイクラのところは、小学生のうちの子供も聴きに来ていました。興味を持つ切り口も大事ですね。

・放射性セシウムとカリウムの生体への影響の違いは何だろう。放射能の謎も多く提示できるといいですね。ヨウ素、トリチウム、ストロンチウムにプルトニウム。福島第一には減ったけど影響を残した核種も含めてたくさんありますし。

・午前のパネルでは、復興と廃炉の両立という視点が少し欠けていたようにも思いましたが、対立軸ではないように思います。1F 廃炉を復興に役立つようにできるか。ということが論点のように思います。1F 廃炉のために復興が遅れているのか？そういう問題ではないように思います。どちらも進めなければならぬところで、廃炉と復興をどのようにすれば、融合、協力関係が作れるのか。そこが主題ですね。

・廃炉と復興の両立について、復興に際し 1F 廃炉のプロセスをサグラダファミリア的に有効に資源化していくかの話が以前の学会でもあったと思います。そこでは、1F の記憶・遺構・教訓等をどう伝えていくかがキーになると思います。午後の部に期待します。

・「将来住みたくない」は、大学生になって他の所に出て、そこで過ごした後振り返ってみるとまた答えが異なってくるように思います。

・石炭ガス化複合発電（IGCC）は、日本が一番進んでいます。その遅れもあること、一方、ドイツは石炭火力の依存せが高いことで石炭火力を抑えようと言う力が大きく働いています。だから IGCC も含めて日本に強い圧力が働いています。環境大臣もそうしたことへの理解が低く、石炭火力を一様に廃棄しようと答えがちです。皆で IGCC を PR しましょう。

・IGCC は難しい立場になっています。国際社会では、石炭を利用すること自体が認められないという位置づけで、カーボンフリーに行く過程で、経過の技術として有用なことを国際社会に説明しないと、日本が悪者になってしまうのでは？

・IGCC は石炭火力の中では低炭素ですが、天然ガスよりは排出量がかなり多く、エネルギー全体のバ

ランスの中で論ずるべきだと思います。

・資料収集できていても、資料解釈できるアクターが、どのくらいいるのか、気になります。archivist養成コースも、九州大学や学習院大学など数えるほどの機関にしかないですし、どういったパートナーングをしているのか、気になります。

・神戸は、産業も文化もある意味、完成の域にあるという認識があったんでしょうね。だから、長田町等の木造住宅群の改善を除けば、復興とは再生が中心になったように思います。神戸での教訓は、審査直後の防災の在り方だったと思います。朝方の政府の動きは大変遅かったという印象です。朝からのテレビなどを見て思いました。一方、地元の活動、民間の救助活動の立ち上げは比較的早かったと思います。自衛隊もすぐに準備したのですが、要請がないと動けなと言う法的な制約があり、改善されたと思います。

・教訓と記憶の違い、ふくしまのこれからの重要な視点と感じました。

・福島沖に潮力発電所を設置して津波に襲われたことの記念碑にできないか。

・原子力災害のその他の災害と根本的に異なるところは、ぷらっとあつとの千年村の調査でも話されましたが、津波や地震、洪水等でも残ってきた千年続いた集落が断絶してしまった点です。

・原子力事故は、福島だけでなく、中央政府の動きも重要です。原発事故収束には、異なる組織が協力し合うことが必要です。後者は、議事録が作成されていないようなので、関係者のメモ類を収集整理すると、証言を得ることが急務に思います。国が積極的に行わないとすれば、伝承館で声をあげていただくことが大切に思います。

・伝承館の「正統性」をどう裏付けるのか、私には気になりました。

・ステークスホルダーの対話では、中立的な専門家の存在があって成功するようです。しかし、東京電力福島第一原発事故では、放射線の専門家集団が統一的な声明を出さなかったところに、専門家が自然放射線レベルでも影響ありと発言し、マスコミがそれを大きく取り上げた。そうしたことで専門家が信頼性を失ったことが不幸の始まりに思います。従って、きちんと対話できる条件作りが重要。若者は、大人より科学的に物事を捉えられるので、対話術を上げて前向きの結論を出すように努めて欲しい。

・残すものでなく、残るもので、今のこの活動がアーカイブとして残っていくのだと思います。記憶や教訓よりも「学び合う姿勢や場」の継承が大事なのかもしれませんね…

・復興の定義や地域の理想像こそ幅広く多様な対話から共通認識をビジュアル的に表現すべきだと思います。

・デンマークなどの北欧にあるフォルケホイスコーレのような自由成人教育の場が参考になるかもしれませんね。

・教えるなどの一方向というより、青木先生のおっしゃるような、今と一緒に考える仲間として、共に学び合える場があったらいいなと思いました。学びはそれを欲したときに自身で学べばよく、誰かに与

えられるべきものではないと考えます。

・アーティスト繋がりでの質問なのですが、メディア・エンターテインメント業界からの福島 1F 跡地に対するイメージアップの熱意や関心は現在どの程度のものなのでしょうか？私的な趣味も含まれますが、かつて大林監督が作成した尾道三部作のように地域振興にスポットを当てた映像作品が効果的に思えてしまいます。また、映像化による記録の継承も同時にできる手段であるようにも思えます。

（その点で、ふたば未来学園の方々の紹介にあった学園の紹介ムービーはとても新鮮で面白いものに思えました。）

・議論すべきは幅広く多様な立場、世代をごちゃ混ぜにそして徹底的に対話し、皆んながある程度の納得感をもって歩みを進められそうな方向性を見出すことだと思います。

・ふたば未来学園の生徒さんたちの地域課題研究の成果が大きければ大きいほど、この地域（浜通り）で育つほかの若者にも無限の可能性があり、こうした課題と向き合うきっかけがあれば地域の大きな力になるだろうという思いが募ります。教育の場が気づきを与える場であってほしいと思います。

以上